

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 高等学校家庭科における「問い」と「振り返り」の工夫を通して —

技術・家庭研修室長 左座 香織

研究協力員 熊本県立玉名高等学校 教諭 太田 雅美

1 はじめに

現在の食生活は多様であり、多くの食べ物や食を取り巻く情報があふれる中で、必要なものを選ぶ視点を持たせるために、食生活の課題に気付かせ、考えさせることは大変重要である。食生活分野の学習では、全体を通して、食に関する基礎的な知識や技能を身に付けさせるとともに、食をめぐる課題を知る中で、自分と社会のつながりについて実感させ、課題解決に向けて考えさせていくことを重視している。本実践では、食生活分野のまとめとして全体の学びを振り返り、「新たな気付き」や「生活に生かしたいこと」を「私たちのこだわり弁当作り」として形にしていく。また、家庭科の見方・考え方を働かせ、食生活を総合的に捉え、食生活を主体的に営む力を育成する。学びや成長について自覚化させることは、これからの社会で未来の創り手となる生徒の育成につながると考える。

2 研究の視点について

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

家庭科の「見方・考え方」については、新学習指導要領解説家庭編に、「生活の営みに係る見方・考え方」として次のように示されている。

生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造するために、家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること

「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点は、家庭科で扱うすべての内容に共通する視点であり、その視点同士は相互に関わるものである。例えば、衣食住の生活に関する内容においては、主に「健康・快適・安全」や「生活文化の継承・創造」の視点から物事を捉えるが、ここには「持続可能な社会の構

築」の視点も働かせ、考察する必要がある。消費者市民社会の一員として生活をみるということは、家庭科のすべての内容の軸を成している欠かせない視点であるといえる。何を選んで、どのように食べるかという意思決定に社会とのつながりの視点を持たせる問いの工夫は、得られた知識や技能を活用して「生きて働く力」につなげるために重要であると考えられる。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

家庭科での学びが「自立に役立つ」と考える生徒は多いが、単に「調理ができるようになる」など「身の回りのことができるようになる」というイメージしか持つことができず、それでは「主体的な生活者」としての役割を果たす力の育成としては不十分である。自分自身の生活行動が社会に与える影響を知り、その上でどのような行動をとるか意思決定し、課題解決につなげる実践する力を身に付ける必要がある。そのためには、現在の自分の生活と社会とのつながりを常に考え、課題に気付かせる過程が重要である。学びをつなげ、生活に関わる事象を総合的に捉える振り返りの工夫が必要であると考えられる。

3 研究の実際

検証授業 高等学校 普通科 第1学年
単元名 「家族・社会との共生 第5章
食生活をつくる」(東京書籍)
～私たちのこだわり弁当作り～

(1) 本単元の授業設計

食生活分野は家庭科を学ぶ上で興味関心があるものの、日常生活において自分で食事を整え、家族のために栄養バランスを考慮した献立を作成するなど主体的に食生活を送っている生徒は少ない。一方で、農業が身近にあり、日常的に地産地消を実践し、食の安全性に関心を持つ生徒もいる。

持続可能な社会を創造していくことが大切であることは理解しているが、自らの食生活が地球に住む

人や生物、環境とどのように関わっているのか考えながら食生活を送っている生徒は少ない。多面的・総合的に物事を捉える力を育てる必要があるものと考えられる。

(2) 単元の目標

一生を通じた食生活を広い視野で多面的に捉え、社会の一員として、主体的に考え工夫した食生活を実践することができる。

(3) 単元計画

単元を貫く問い：食を取り巻く課題解決のために、こだわり弁当を完成させよう。

- 第 1 時 こだわり弁当のテーマ設定
- 第 2 時 献立作成と調理法の確認
- 第 3・4 時 こだわり弁当作り
- 第 5 時 弁当作りと食生活分野の振り返り

(4) 研究の視点

〔視点 1〕

単元を貫く問いを設定し、その問いを解決するために「一枚ポートフォリオ」の振り返りをもとにした弁当献立の作成をとおして、お互いの考えを検討させることで、食生活を総合的に捉え、自分と社会のつながりに気づき、食生活の考え方を深めさせる。

〔視点 2〕

毎時間の「一枚ポートフォリオ」の記録とその振り返りの中で、食生活を総合的に捉え、自分と社会のつながりを実感させる。また、自らの考えを明確に持って意思決定を行い、課題解決のために主体的に食生活を営む力をつける必要性に気付かせる。

(5) 授業の実際

① 一枚ポートフォリオの振り返りを効果的なものとするための取組（検証授業までの取組）

ア グラフィックシラバスによる学習イメージの視覚化

一枚ポートフォリオ（図 1）の裏面には、食生活分野全体の学習内容をグラフィックシラバス（図 2）で示した。食生活分野の内容とそれに関わる家庭科の内容の系統性や関係性を図示化したもので、知識を組織化、構造化する点で有効である。生徒たちが、「今日



は何を学ぶのか」「これから何を学んでいくのか」ということを可視化し、見通しをもたせることができる。

事後アンケートより、全ての生徒が学習のイメージを持つことができたと言った。教師自身が、授業前に単元のシラバスを作成することで、生徒に伝えたいことや学習の流れをイメージして授業に臨むことができた。

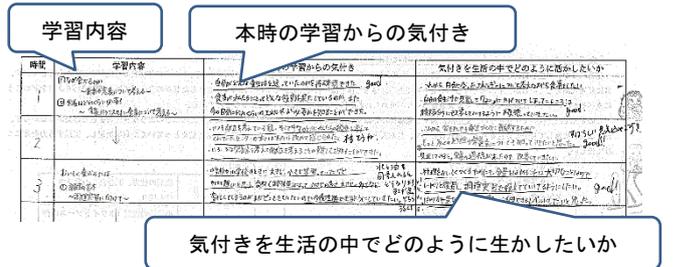


図 1 一枚ポートフォリオの一部

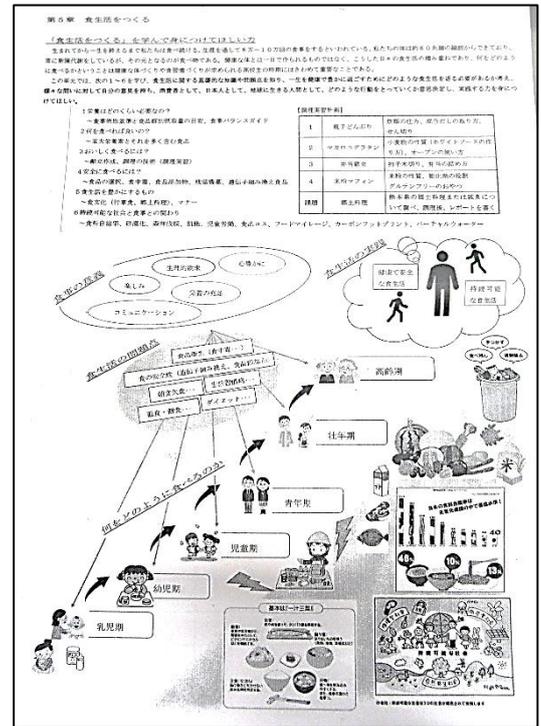


図 2 グラフィックシラバス

- ・学習すべきことがわかり、やる気がある。
- ・目標は言葉で聞いても忘れるので、文字やイラストにしてあるのは良かった。
- ・調理実習のコツを事前に母に聞くことができた。

イ 知識構成型ジグソー法を活用した他教科との関連を図る工夫

食生活分野の学習の中に他教科の視点を取り入れることは、家庭科の学習で得た知識や技能を活用し、食生活を捉える視野が広がることにつながる。

そこで、「脂質」に関する学習において、理科や公

民の教科担当者のアドバイスを受け、資料集等を活用し、エキスパート活動の資料を準備した。生活を科学的に捉えるためにも他教科と関連付けることは、栄養素の一つとしての「脂質」という視点だけでなく、体内での働きを科学的に理解した上で生活習慣病の予防や、環境問題にも関わりがあることなど幅広い理解につなげるものとした。

事後アンケートより、98%の生徒がジグソー法での学びに意欲的に参加できたと答えている。日頃積極的に発表する生徒は少ないが、主体的に担当部分を調べ、発表することができていた。他教科との関連を図った点では、肯定的な感想が多く見られた。

- ・他教科とのつながりが見えた。
- ・生物基礎で既習のものが出てきて覚えやすかった。
- ・他教科の復習やより理解することにつながった。
- ・全ての教科を頑張ろうと思えた。

ウ K P法による食に関する課題のまとめ

教師側の説明の時間を短縮し、生徒自身の思考の整理に時間を確保したいと考え、K P法を用いて、食を取り巻く課題を班ごとに発表させた。まとめる際には、それぞれが得た情報をすぐに班内で確認することで、理解を深めていた。聴く側の生徒にとっては、教師の説明を受けた場合よりも質問しやすいという意見があった。



② 食の課題解決につなげるこだわり弁当のテーマ設定（検証授業における取組）

ア 個人での一枚ポートフォリオの振り返り

一枚ポートフォリオと前時のK P法による食に関する課題の発表の資料を参考に、自分自身が大切にしたい食のポイント、こだわりたい内容を付箋に書き出す。

イ グループでの共有とテーマ設定・献立作成

付箋に書き出した自分のこだわりポイントをマトリックス図(図3)に貼り出す。貼り出した付箋をグルーピングしながら、



班としてのこだわり弁当のテーマを決定する。テ

マ設定の条件として、社会の一員であることを意識すること、食を取り巻く様々な課題の解決につながるものであること、食品群別摂取量のめやすを意識すること等を示した。

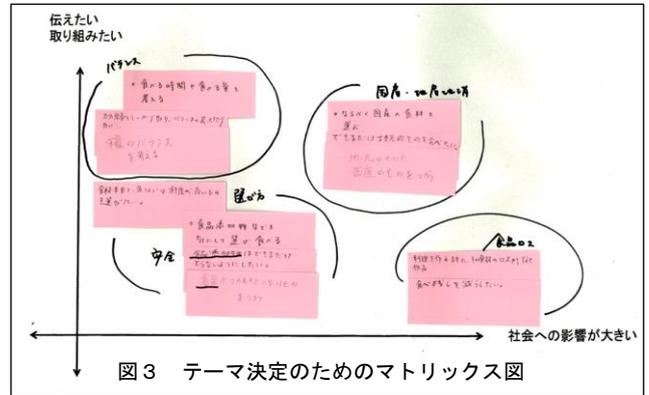


図3 テーマ決定のためのマトリックス図

【各班から出された弁当のテーマの一例】

- ・パーム油の使用を減らして環境保護を考える弁当
- ・食の欧米化による PFC バランスの崩れに対応する弁当

ウ 各班によるプレゼンテーション

各班のこだわり弁当のテーマ、この弁当を通して伝えたい思い、テーマの表現のしかた、盛り付け図などを発表する。聞き手は、良かった点、質問、アドバイスなどを付箋に記入し、それぞれの班に渡す。

エ こだわり弁当の見直し

他の班からの意見を参考にテーマ設定と献立の内容を再確認させた。「料理そのもの」に偏る傾向があるが、



テーマや献立が社会とのつながりを考慮したものかを確認するために、「この弁当を通して伝えたい思い」の記入を再度促した。このことで以下のように思考が深まった。

- 一概に「地産地消」ということだけで弁当をつくるのではなく、レシピに何か付け足すなど、+αが必要と自分たちの班のお弁当を考えながら感じた。

(6) 検証結果と考察

① 学習アンケートより

表1は、実践の前後に調査した質問紙調査の結果である。「家庭科の学習で、どのように活動を行うのか、見通しを持って学習に取り組んでいる」と「家庭科の学習で何を学んだのか、どのように学んだのかについて振り返っている」の2項目について有意な向上が見られた。研究の視点2によって「一枚ポート

表1 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=41)
有意確率**<0.01 *<0.05

質問	事前	事後	差
自分は、家庭科の学習で、どのように活動を行うのか、見通しを持って学習に取り組んでいる。	2.51	2.83	0.32*
自分は、家庭科の学習で何を学んだのか、どのように学んだのかについて振り返っている。	2.39	2.78	0.39*
自分は、家庭科の授業の中で、友達と話し合ったり、協力したりしながら学習に取り組んでいる。	3.00	3.49	0.49**

フォリオ」で毎時間の振り返りを行ったこと、一枚ポートフォリオの裏面に示した「グラフィックシラバス」を常に意識しながら、主体的に学習に向かうことができた」と推察した。

「家庭科の授業の中で、友達と話し合ったり、協力したりしながら学習に取り組んでいる」の項目について有意な向上が見られた。また、自分の考えを明確にしなが、他者の考えを知るような授業において、「班の人と意見を共有し、違う視点で考えることができた」という意見を得た。これらの結果から研究の視点1が自分自身の思考に影響を与えるなど、内容が「自分ごと」化し、主体的に食生活に向き合う姿勢につながったと考える。

表2 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=41)
有意確率**<0.01 *<0.05

質問	事前	事後	差
自分は、家庭科の授業の中で、家族や家庭、衣食住、消費環境などに係る生活事象において、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点から解決すべき問題を捉え、よりよい生活を実現するために考えながら学習に取り組んでいる。	2.51	2.93	0.41*
自分の、他教科の視点を入れながら、総合的に家庭科の学習を捉える力は高まっている。	2.39	2.78	0.37*

表2からは、「家庭科の『見方・考え方』から解決すべき問題を捉え、より良い生活を実現するために考えながら学習に取り組んでいる」と「他教科の視点を入れながら、総合的に家庭科の学習を捉える力は高まっている」の項目について有意な向上が見られた。これらのことから研究の視点1によって設定した単元を貫く問いに対して、その問いを解決するために単元を通して学んできた個々の知識や既習の知識を融合させ、食生活を総合的に幅広い視点で捉え、主体的に社会の一員として実生活で生かそうとしたと考える。

② 学習活動より

生徒のワークシートの記述内容や授業観察から、「食を取り巻く課題解決のためにこだわり弁当を完成させよう」という問いが、生徒たちの食生活を捉える視野を広げ、社会とのつながりを意識しながら工夫していく活動につながったことが確認できた。

私たちは、国内のことを第一に考えていたが、発展途上国のことを考えフェアトレード食品を取り入れようとしていた班もあり、今後の私の生活にも生かしたい。

スーパーに行くと熊本県産の食材が意外と少なく外国産のものが多いことに驚いた。食料自給率向上のために値は少し張るが国内産のものを購入したい。

4 研究のまとめ（成果と課題）

(1) 成果

これまで述べてきた表1・2の変容から、視点1の見通しを持ち、幅広い視点を持たせる学びの方法や問いの工夫により見方・考え方が働き、視点2の一枚ポートフォリオやグラフィックシラバスによる見通しを持った主体的な学びの実感が得られた。家庭科の学習内容が定着し、既習事項を組み合わせる総合的に捉えようとするなど、食生活における視野を広げ、主体的な実践につなげることができたと考える。

(2) 課題

今回の単元を通じた取組だけでは、献立作成や調理の経験に乏しい生徒にとって、「こだわり弁当」のテーマを設定したり、実際に調理をするために必要な知識を十分に得たりすることは難しく、実践過程での試行錯誤を支える工夫などの改善が必要である。また、食生活分野の学習の中に他教科の視点を取り入れるためには、教師自身が関連性を整理し、例えば、他教科とのつながりをまとめたマトリックス表を作成するなどが考えられる。

5 おわりに

「家庭基礎」2単位の中で「主体的に生活を営む力」を育成するためには、生活を総合的に捉える視点が不可欠で、振り返りや見通しを持たせる工夫が効果的である。衣食住の生活すべてにおいて、社会とのつながりを常に意識し、責任ある意思決定と課題解決の実践ができる生徒を育てる授業が求められる。

《引用・参考文献》

・文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 家庭編」